【遠藤保仁選手】

サッカーが教えてくれたこと

遠藤保仁（やすひと）

二〇〇六年（平成十八年）六月、ドイツのヴェストファーレンスタジアムに、試合終了を告げるホイッスルが鳴り響（ひび）きました。それは、三度目のワールドカップ出場を果たしたサッカー日本代表が、一勝も出来ないまま本大会を去ることが決まった瞬間（しゅんかん）でもありました。

ピッチやベンチでうなだれる選手たちの中に、ひときわ悔（くや）しい思いで佇（たたず）む選手がいました。遠藤保仁選手。チームのフィールドプレーヤーの中で、彼だけが、一度も試合に出られないままでした。

遠藤選手は、一九八〇年（昭和五十五年）、鹿児島県

【ＦＩＦＡワールドカップ】

ＦＩＦＡ（国際サッカー連盟）が主催し、四年に一度開催されるサッカーの世界大会で、世界を六地域に分けて予選を行う。

本大会では、三十二チームが八グループに分かれて予選リーグを行い、その上位二チームの一六チームが決勝トーナメントに進出する。

【関連年表】

一九八〇年　誕生

一九九八年
　高校卒業と同時に横浜フリューゲルスに入団。

一九九九年
　横浜フリューゲルスが消滅し、京都パープルサンガに移籍。
　同年、ナイジェリア・ワールドユース準優勝。

二〇〇一年
　ガンバ大阪に移籍。

二〇〇二年
　日本代表（A代表）デビュー。

二〇〇六年
　ドイツ・ワールドカップ

二〇〇八年
　ガンバ大阪がAFCチャンピオンズリーグで優勝。大会MVPを獲得。

二〇〇九年
　アジア年間最優秀選手賞受賞。

二〇一〇年
　南アフリカ・ワールドカップ

の桜島町（現在の鹿児島市桜島）で生まれました。大正時代の大噴火で大隅半島と陸続きになった、桜島の西側の麓です。

　桜島町は、少年サッカーの盛んな地として知られ、一九七〇年（昭和四十五年）には、この小さな町に「桜洲サッカースポーツ少年団」と「桜峰サッカースポーツ少年団」が、それぞれ発足しています。周囲の熱烈な応援も加わって、この同じ町の二チームが、県大会の決勝戦で幾度となく激突し、やがて両チームの少年たちが集まった桜島中学校が全国大会で三位の成績を収めるなど、「サッカーのまち桜島」の名は全国に広まりました。

　その少年達の中で、特に卓越した技術を持ち、鮮やかなプレーで周囲を魅了する、三人の兄弟がいました。地元で知らない人はいない、この「遠藤三兄弟」の末っ子が、遠藤選手です。この頃から遠藤選手は、周囲から、

【噴煙を上げる昭和火口（垂水市牛根麓から）】

【桜島の黒神埋没鳥居】

【遠藤三兄弟】
（左から長男の拓哉さん、三男の保仁さん、二男の彰弘さん）

名前の「保仁」をもじった「ヤット」という愛称（あいしょう）で呼ばれていました。

まだ遠藤選手が小学校に入る前の頃から、遠藤家では、小学生の二人の兄と友達が、登校前に庭でサッカーをするのが日課になっていました。これに遠藤選手は「飛び級」で混ざりながら、どうすれば自分より体の大きい兄たちからボールが奪（うば）えるのかを、必死に考える毎日でした。二人の兄こそが、遠藤選手の技術を最初に磨（みが）きあげた、かけがえのないライバルだったのです。

小学校に入学し、中学校に進学しても、遠藤選手はサッカーに熱中しました。小学校時代のある朝、珍（めずら）しく熱を出した遠藤選手は、父の武義さんから学校を休むように言われますが、涙ぐみながら「学校へ行きたい」と言い返したそうです。結局その日も登校した遠藤選手の

【遠藤拓哉】
一九七三年（昭和四十八年）生まれ。
桜洲小―桜島中―鹿児島実業高校―鹿屋体育大学―京セラ川内

※「Ｊリーグがもう少し早くからあれば、絶対にプロになっていた。」と遠藤選手は語っている。

【遠藤彰弘】
一九七五年（昭和五十年）生まれ。
桜洲小―桜島中―鹿児島実業高校―横浜Ｆ・マリノス―ヴィッセル神戸（引退）

【考えてみよう】
あなたの周りにも、遠藤選手の兄や友達のように、自分を高めてくれる人がいないだろうか。

【壁の穴】

遠藤選手は中学校時代、学校の敷地にある擁壁に空いていた、直径約五センチの小さな穴をめがけて、距離やコースを変えてボールを蹴る練習をくり返していた。

実際にプレーするときは、ワンタッチやツータッチでシンプルにプレーすることに興味があったという。

【兄のプレーの研究】

遠藤選手は子どもの頃から、兄である拓哉さんの高校時代の試合のビデオを、何度も巻き戻したりスローで再生したりして研究し、自らのプレーに役立てていたという。

【桜島フェリー】

桜島港と鹿児島港の約三・五㎞を約十三分で結ぶ、二十四時間運行のフェリー。

一日の平均乗客人員は、約一万人（平成二十二年度）。

体調は、夕方には無事回復し、いつも通りサッカーの練習をすることができました。

※桜島サッカースポーツ少年団で、監督として遠藤選手を指導した藤崎信也さんは、この頃の遠藤選手のことを、次のように話しています。

「彼は、素直な性格で、基本を大事にする、賢いプレーヤー。小さい頃から、サッカーの試合やビデオを繰り返し見て、質の高いプレーを追求し、プロとしての戦術眼を磨き、自分の課題について考えていました。常に向上心を持ち、チームのために懸命に走ることができる、努力の人です。」

高校のサッカー部に入った遠藤選手の毎日は、更に厳しいものになりました。朝六時の※桜島フェリーに乗って、自転車で西鹿児島駅（現在の鹿児島中央駅）まで行

【桜島サッカースポーツ少年団】

桜洲サッカースポーツ少年団と桜峰サッカースポーツ少年団は、一九九〇年（平成二年）に桜島サッカースポーツ少年団として統合され、現在に至る。

【高校時代の遠藤選手（写真中央）】

き、スクールバスに乗って学校まで、片道だけで一時間以上もかかります。朝練、授業、放課後の練習を終えて、帰りは夜十時三十分のフェリーに乗り、家に着くのは夜の十一時。それから風呂に入って、食事をし、寝るのは更に夜遅くです。

そんな毎日の中でも、遠藤選手が「サッカーを辞めたい」と思ったことは、一度もなかったそうです。

高校三年生になる春休みには、ブラジルのサンパウロに一か月間のサッカー留学も経験し、現地のクラブチームの選手たちから学んだハングリーさや厳しさ、プロに対する意識などは、その後の遠藤選手の高校での練習にも生かされることになりました。

高校選手権でも活躍を重ねた遠藤選手は、一九九八年（平成十年）、高校卒業と同時にＪリーグの※横浜フリ

※　一九九九年（平成十一年）に横浜マリノスと合併し、横浜Ｆ・マリノスとなる。

【ガンバ大阪でプレーする遠藤選手】

ューゲルスへ入団します。そして、直後のシーズンの開幕戦に、十八歳のルーキーながら出場を果たし、念願だったプロのサッカー選手としての第一歩を踏み出したのでした。

その後、入団一年目に横浜フリューゲルスが消滅するという大きな危機があり、遠藤選手は京都パープルサンガへ移籍することとなりますが、既にこの頃には、彼のプレーはJリーグでもひときわ注目されるレベルとなっていました。移籍後すぐの、一九九九年（平成十一年）のナイジェリア・※ワールドユースで、二十歳以下日本代表の一員となった遠藤選手は、ミッドフィルダーとしてチームの準優勝の原動力となり、「世界とも戦える」という自信を手に入れます。

そして二〇〇一年（平成十三年）には強豪のガンバ大阪へ移籍し、チームの中心選手として活躍していた遠

【FIFAワールドユース選手権大会】

二年ごとに行われる、二十歳以下の各国代表チームによるサッカーの国際大会。

藤選手にとって、大きな試練となったのが、二〇〇六年（平成十八年）のワールドカップ・ドイツ大会でした。

ワールドカップ・ドイツ大会で、日本中の期待を背負った日本代表チームは、一勝もできないまま、予選リーグで敗退します。早々に姿を消すこととなったチームの中で、唯一ピッチにさえ立てなかったフィールドプレーヤーが、遠藤選手でした。フル代表に選ばれた誇（ほこ）りと、これまで味わったことのない悔しさ。「もっと上手く、強くなりたい。南アフリカ大会で結果を出す。」そのとき既に、遠藤選手の目は、次の四年後のワールドカップを見据（みす）えていました。

Ｊリーグに戻った遠藤選手は、進化を続けます。二〇〇八年（平成二十年）には、ガンバ大阪の※ＡＦＣチャンピオンズリーグ優勝の原動力となり、大会ＭＶＰを

【ＡＦＣチャンピオンズリーグ】
アジアサッカー連盟（ＡＦＣ）が主催する、クラブチームのアジア選手権大会。

獲得。続く翌年にはアジア年間最優秀選手賞を受賞するなど、その活躍は海を越えて行きました。

二〇一〇年（平成二十二年）、ワールドカップ南アフリカ大会。四年前の決意を胸に、遠藤選手は、日本代表チームの「※心臓」として、全試合出場を果たしました。

そして迎えた予選リーグ第三戦のデンマーク戦。勝てば決勝トーナメント進出、負ければ予選リーグ敗退が決まる大一番で、前半三十分、伝説のゴールが生まれます。

ゴール正面、距離約二十七メートルで得た、日本のフリーキック。遠藤選手の右足から放たれたシュートは、強く美しい曲線を描きながら、鮮やかにゴール右に吸い込まれました。

世界のサッカーファンを驚かせ、一瞬で魅了した、芸術的なコントロールキック。この決勝点となったゴール

【約束】
このデンマーク戦の前に、遠藤選手は長男の楓仁君に、ゴールを決めると約束をしていた。
そして実際にフリーキックが決まった瞬間、遠藤選手は「ゴールを決めたよ」と空に手を突き上げた。

【心臓】
当時の岡田武史日本代表監督は、遠藤選手を「チームの心臓」と評した。

【考えてみよう】

フリーキックを決めた遠藤選手は、なぜベンチに向かって走り出したのだろう。

が決まった直後、遠藤選手は、一直線に日本チームのベンチへと駆(か)け出します。それは、自分自身とベンチメンバー、そしてスタッフへの四年越しの思いが凝縮(ぎょうしゅく)された、家族ですら「見たことがない」と言うほどの、彼の長いサッカー人生でも初めての行動でした。

その後、決勝トーナメントの一回戦で、日本はパラグアイにＰＫ戦で惜敗(せきはい)しますが、遠藤選手は大会での経験を、

「チームが一つになれば、強い相手にも結果が出せる。チームの『和』は改めて大事ということが分かりました。個人としても、明確な目標を持ち、努力することが非常に大事。これからも、修羅場(しゅらば)をくぐり抜けて、もっと人間的に大きくなっていきたい。」

と、振り返っています。

最後に、遠藤選手から、鹿児島の中学生の皆さんへ贈られたメッセージを紹介します。

「一人一人、目標を持つことが大切です。サッカー選手、野球選手、勉強をして弁護士になりたい、など。

すぐに目標まで到達できないかもしれませんが、努力することが一番大切です。百人いたら百通りの考え方があります。自分の考えに自信を持ってください。

最大限努力してうまくいかないときは、ムキにならず、一度ゆっくり考えなおしてみてください。一回立ち止まることで、見えてくることもあります。そこでもう一度、目標を確認することも大事です。

友達をたくさん作り、外で遊び、楽しい中学生活を送ってください。」

遠藤選手の努力は続きます。大好きなサッカーを楽しむために。